灰色の日影

八尾利之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰色の日影

【Ｎコード】
Ｎ０７８４Ｆ

【作者名】
八尾利之

【あらすじ】
雪に支配された町に住む少年トウヤは、両親もおらず一人で暮らしていた。気前のいい工場長に拾われパン工場で仕事をする傍ら、工場長の娘ヒナタと共に飛行機造りに熱中する。夢は「太陽を見る」こと。しかし数々の障害が二人の前に立ちはだかる。

第1章

一人の少女が、外灯の輝く薄暗い町中を歩いていた。夜ではない。いつも通りの昼下がりだった。人々は白い息を吐きながらせかせかと歩いている。少女は頭からかぶっているフードをたぐりよせ、手袋をつけた両手をすりあわせた。肩にかかっていた雪が綿のように散っていく。

少女は路地を折れ、窓々から吹き出ている蒸気を避けながら奥へと進む。やがて薄汚れた看板が見えてきた。

『なんでも屋　なんでもします』

ドアの上につり下げられている電球は消えていた。少女は当たり前のようにドアを勢いよく叩いた。

「おじさん！　おじさん！」

突然、電球が目を覚ましたかのように数回まばたきをしてから点灯した。ややあってドアの鍵が開く音がした。わずかにドアが開き、向こう側の男はひゃあと声を出した。

「寒いねぇ。ヒナタちゃん」

腹に羽毛でも詰めているのかと思うほどの男は、その体躯にも関わらずヒナタ以上の厚着をして震えていた。蒸気がドアの隙間から噴き出してくる。むっとした暑さに、ヒナタはたじろいだ。室内がゆらいで見える。

「布、今日来るって言ってたでしょ。いつまで経っても来ないんだもの」

「ああ、ああ、そうだったね。もちろん届けるつもりだったよ。こんな朝早く……」

「もう昼過ぎよ」

おじさんは照れたような笑い声をあげた。

「もう用意はしてあったんだ。今持ってくるから、ちょっと待ってもらえるかな。よかった入って待っていてよ」

「やめておくわ。丸焼きになりそうだから」
ヒナタは視線を足に落とした。積もっていた雪が、店の周りだけ溶けていた。おじさんはハハハと笑うと、すぐに戻るからと奥へ引っ込んでいった。
「あんなに厚着してるのに、なんで寒いのかしら」
ヒナタはドアからあふれ出してくる蒸気から離れて、雪の中で待った。路地の上空は、冷たい空気と熱い蒸気が混ざり合っている。落ちてくる雪はわずかだった。ほとんどは落ちてくる前に蒸発してしまうのだ。
言葉通り、おじさんはすぐに戻ってきた。ドアのすぐ横にあるシャッターが開くと、熱気が一斉に飛び出して、わずかな間雨が降った。さすがのヒナタも雨には参って、暑いのを覚悟でシャッターの下に逃げ込んだ。
倉庫には様々な荷物が積み重なっていた。電球はどれも切れかかっていて、暖色系の薄暗い光を投げかけている。おじさんは荷物の中から一抱えほどもある梱包物を引っ張り出した。
「ソリに乗せよう」
二人は運搬用のソリにそれを乗せた。おじさんはすぐに汗をかいてふうふう言い始めたので、ヒナタは彼を休ませてソリに荷物を縛り付けた。
「ありがとう、おじさん」
「またなにかあったらよろしくな」
ヒナタはソリに乗り込むと、両足で踏ん張って雪を蹴った。水っぽい雪にソリはすぐにめりこんで、ほとんど地面をこするように進んだ。路地を出る頃には雪の硬さは確かなものとなり、下り坂を滑るような速度で進んだ。
町は閉じていた。しゃべる者はほとんどおらず、外を出歩くのはわずかな時間と取り決めているようだった。皆急いでいた。逃げ込むように建物に入っていく。その窓から見える内部は活気に溢れていた。会話と笑いで充ちている。分厚い服を脱ぎ捨てて、身も心も

軽くなっていた。
　ここはそういう町だった。寒さが振り払われることはない。光は電球だった。伝説や噂、あるいは教科書にある歴史の項目の中にだけ太陽があった。
　ヒナタは黙々と蹴り続け、町外れにある古びた家までやってきた。入り口前にソリを止め、中に入る。室内は油の匂いが充満していた。入ってすぐにキッチンがあり、ストーブに乗せられているポッドが蒸気を噴き出している。ヒナタは手袋を外して、冷たくなった指先を蒸気に当てた。ストーブの隣には食卓が置かれ、低い天井には洗濯物が干されている。左手にはドアがあり――開かれたままだ――広い倉庫が見えた。そこには、木で組まれた巨大な機体が横たわっていた。倉庫から、ナットをしめる音がカチカチと響く。ヒナタは十分に暖まった指先を確かめると、コートとマフラーを脱いでストーブの上にかけた。カップを二つ取り出して、コーヒーを作った。自分の分に砂糖を三杯入れる。カップを手に倉庫に向かいのぞいてみると、機体の下から足だけが伸びているのが見えた。
「トウヤ、持ってきたよ」
　ナットをしめる音がやんだ。
「早かったね」
　機体の下からずりずりとはい出てきたのは、ヒナタと同じ年頃の少年だった。ヒナタは彼にコーヒーを渡して、彼がそれを飲むのをじっと見つめていた。
「ありがとう。外？」
「うん。あとは自分でやって」
　トウヤはカップを脇に置くと、機体にかけてあったコートを着込んだ。
「重かったでしょ」
「おじさんがソリを貸してくれたから。返しに行ってね」
「きっと僕が行ったら、あの人貸してくれなかったよ」
　トウヤはキッチンのほうに歩いていった。

「だから私を行かせたの？」
ヒナタがトウヤのほうを振り返ると、トウヤはすでに外に出て行ったあとだった。

第2章

トウヤは一人だった。気がつけば両親はいなかった。しばらくは「親族だ」と名乗る老人に育てられていたが、トウヤが小学校を出る頃に亡くなってしまった。家は老人が残した唯一の遺産であった。老人は腕のいい技師だったらしく、町のあちこちに顔が通った。そのツテでたどり着いたのがあるパン工場であった。パン工場の工場長は老人と仲が良かったらしく、本来なら取らない年齢のトウヤを雇ってくれた。工場には多数の工業用機械が並んでいる。大部分は旧式の蒸気機関であったが、一部は内燃機関も使われていた。こうした機械は非常にナイーブで、紙を裂くように簡単に壊れた。それで大量の技師が必要なのであった。トウヤは経験こそなかったものの、小さい頃から老人の作業を見よう見まねで手伝っていたため覚えは早かった。

工場長には、ヒナタという名の一人娘がいた。彼女は工場内で仲良くなった最初の一人である。彼女も同年代の友人を得ることができて喜んでいるようだった。それでもトウヤが秘密を告白できるようになるまでには、さらに数年が必要だった。

「飛行機を作っている」

と言うのには、かなりの勇気が必要だった。飛行機は遙か昔に廃れた技術だったからだ。

雪が降り続くようになったのがいつからなのか、誰も知らない。あらゆる歴史はある一時期を境にして遡れなくなっていた。まるで突然発生したかのように、今の文明ができていた。そしてその頃からすでに飛行機は使用不可能な技術として伝えられていた。トウヤを育てていた老人はそうした技術を収集するのが趣味だったらしく、飛行機の設計図もそのうちの一つであった。トウヤは瞬く間に飛行機の魅力にとりつかれた。パン工場で働き一定の収入が得られるようになると、少年は得た資金の大部分を部品集めにつぎ込むように

なっていく。
今でも飛行機を作っていることを知っている人間はごくわずかだ。うさんくさいなんでも屋のおじさんは、金さえ用意すれば本当になんでも用意できた。彼はたまにトウヤの倉庫にやってきて、
「お、まだやってるな。関心関心」
とニヤニヤしながら飛行機の組み立てを見守ることもあった。
また工場長も知っている一人だ。彼の場合はトウヤから話したというよりは、ヒナタ経由で知ることとなった。ヒナタが最初にトウヤの秘密を知り、飛行機作りを手伝うためにトウヤの家に出入りするようになっていたある日、工場長がこっそり後をつけていたことがあったのだ。それでバレた。工場長はヒナタから冷水に突き落とされたかのような怒りを受けて反省し、それきり後をつける真似はしていない、と聞く。
飛行機の作成は順調だった。今までは骨格がむき出してあったが、今日買ってきた布を張ってやると、ずいぶん形になった。特に十メートルもある翼の見栄えは格段によくなった。それまではトウヤ自身も飛ぶかどうか半信半疑な部分があった。しかしこうして布を張ってみると、確かに飛べそうな気がしてくる。
「これでもう飛べるの？」
ヒナタはまだ信じられていないようだった。
「まだだよ。外見はほぼ完成したけど、中がね」
「あとなにが足りないの？」
「燃料タンクとか、ワイヤーももっといる。でも一番肝心なのはエンジンなんだよ。これさえ手に入ればなぁ」
「それ、前も言ってたわね」
その通りだった。トウヤの悩みはずっと前からあった。飛行機の動力源となるエンジンは、もちろん現存するわけもなく、完全にオーダーメイドだった。しかも内燃機関エンジンである。パン工場の持つ信頼性の低い大型内燃機関でさえ非常に高価だというのに、それを信頼性を高めた上で小型化するとなると、トウヤの稼ぎではと

ても買うことなどできない。なんの解決方法も思い浮かばないままずるずると続けてきたが、もう少しで完成というところまで来ると直視せざるを得ない。

エンジンを早く買うためには、たくさん仕事をするほかない。飛行機作りですることが減るに従って、仕事に費やす時間が増えていった。元々才能はあったから、トウヤは若いながら信頼を得ていき、優秀な技師へと育っていった。

第3章

いつもと変わらぬ雪の日であった。その日は朝から町が慌ただしかった。トウヤは早くに目が覚めて、そわそわとした町の気配を感じ取った。普段なら皆外には出たがらないのだが、その日に限って外出者が目につき、そのため蒸気が普段より少なく遠くまで見通すことができた。町を囲むように迫るなだらかな山は、半ばはげ上がった林で埋まっている。どれもが灰色だった。空には低い雲がずうっと先まで続いており、コーヒーに垂らしたミルクが混ざり合うようにうねっている。その動きは巨大な手が灰色のふるいを揺すっているようにも見えた。その証拠に、細かく小さく撹拌された固まりが驚くほどゆっくりと音もなく落ちてきている。

町のほうから、ヒナタがやってくるのが見えた。手にかごを持っている。手を振ってきたので振りかえしてやると、彼女は駆け足になった。トウヤは窓を閉めてキッチンに向かうと、ポットを火にかけた。なにか食べ物がないかと探しているうちにヒナタが入ってきた。

「パン、持ってきたよ」

「うん」

貯蔵庫にはわずかにじゃがいもとたまねぎがあるだけだった。

「今付け合わせを作るから」

しゃがいもとたまねぎを一つずつ取り出し、丁寧に切って炒め、塩を振る。

「今日、休みだよね」

「そうだよ」

それを一皿に盛って食卓に出した。二人はそれをパンに乗せて食べた。

「今日、鉄道が来るんだって」

ふと思い出したかのようにヒナタは言ったが、明らかに言いたく

て仕方がないといった様子だった。
「そうなんだ。珍しいね」
最後に鉄道が来たのはいつだったか。少なくとも数年は記憶にない。
「そうなのよ。お父さんから聞いたんだけど、貴族が来るんだって」
「貴族？　なんでまたこんなところに」
ヒナタはパンにぱくつくと、食いちぎった跡を見つめた。
「なんか、うちの工場を見に来るみたい。うちの工場の経営者なんだって」
「工場長が経営してるんじゃないの？」
「私も知らなかったんだけど、借りてるだけみたい。今後新しい機械を入れるらしくて、試験的にいくつかの工場で運営させるんだって。その一つがうちになったみたい。うち、結構生産してるみたいなんだって」
「へぇ」
「お父さん喜んでたよ。トウヤが来てから機械が壊れにくくなったって言って」
ヒナタは工場長の声真似をしたが、全然似ていなかった。これなら自分のほうが上手く声真似ができる、とトウヤは内心思いつつ、本当に工場長に言われた気がして顔が熱くなった。
「なに、照れてるの？」
指摘されて、トウヤの額に一気に汗が噴き出した。
「そんなわけ、あるわけないだろ」
トウヤは強引にパンを詰め込むと、慌てて立ち上がった。あまりにうろたえていたため、椅子に足をひっかけて転びそうになった。たたらを踏んでなんとか耐えたが、声がしたので振り返るとヒナタが大笑いをしていた。
トウヤは失態をヒナタに見られたことで頭が熱くなった。胸が苦しくなった。唐突に怒りが沸いてきた。
「笑うなよ！」

突然のことに、ヒナタは息を飲んだ。
「ご、ごめん」
「も、もう帰ってくれ！」
「いきなりどうしたのよ」
「いいから帰れよ！」
トウヤはわけがわからなくなっていた。ヒナタは急いでコートを着てマフラーをつかんだものの、その場に立ちつくしていた。
「ごめんなさい……」
トウヤが乱暴にドアを開けると、彼女は縮こまって飛び出していった。怒りに任せて思い切りドアを閉めてやろうかと思ったが、もし彼女が翻意して戻ってきたら、ドアに顔をぶつけてしまうかもしれないという思いがなぜか突然思い浮かび、急激に気分が萎えていった。ドアは半分開いたままだったが、彼女は戻って来なかった。外を見て目が合うのも恥ずかしく思い、静かに戸を閉める。手が震えていた。なぜ急に怒りが沸いたのか、自分自身理解できなかった。頭の熱が引いていくと、立ちくらみがして倒れそうになった。足も震えていた。
ふらつきながら倉庫に向かい、飛行機によじ登って座席に潜り込んだ。木製のシートは痛かった。ワイヤーを繋いでいない操縦桿は横に倒れていて、計器板もほとんどの計器部分は穴が空いているだけだ。トウヤはなんのために飛行機を作っているのか疑問に思った。それに熱中している自分がバカらしく思えた。設計図通りに作れたとしても、飛べる見込みはほとんどない。町の上空は冷気と暖気がせめぎ合っていて、気流はとても不安定だった。それに上空は地上よりも寒くなると聞く。エンジンが持つかどうかもわからない。家の多くは原始的な薪と火による暖に頼っている。それは機械が入れられないわけではなく、機械を入れたところで、凍り付いてしまって役に立たないからだ。工場のような機械を入れざるを得ないところでは特に温度に気を遣っている。一部の蒸気機関は二十四時間動き続けており、部屋の暖房を維持しているのだった。

考えれば考えるほど無謀に思えてくる。今までなぜ無視できたのだろう。あのとき、老人が亡くなったあの日、遺品の整理をしているときに設計図を見つけたときから、今まで熱病にでもうなされていたのだろうか。

遠くで遠吠えのような汽笛の音が響き渡った。今更見に行く気力もなかった。ヒナタとばったり出会ってしまうことも避けたかった。

夕方すぎに訪問者があった。工場長だった。さすがに追い返すわけにもいかず出迎えたが、内心は朝のことを言われるのではないかと気が気ではなかった。工場長は出されたコーヒーをすすってから、おもむろに口を開いた。

「飛行機はどうだ？」

「……順調ですよ」

「そうか。お前も頑張っているようだし、はやく飛行機が完成できるように、もうちょっと給料を上げてやらないとな」

「そんな……」

工場長は懐から一枚の紙を取り出すと、それを食卓の上にそっと乗せた。用紙には、工業機械の導入に関する手順が書かれていた。

「これは？」

「今度、うちで新しい機械を入れることになったんだ。実は今日それの契約が行われてね。鉄道が来てたの、知ってるだろ」

「ええ、まあ」

「見たか？」

「いえ……」

ふうん、と工場長は背もたれに体を預けた。

「ヒナタと行ったんじゃないのか？」

心臓が早くなってきた。視線がどんどん下降していく。

「まあ、いい。それより、今日来たのはお前に頼みたいことがあったからなんだ」

工場長は用紙を指で叩いた。トウヤが顔を上げて用紙を見ると、工場長はニヤリと笑ってみせた。

「これをお前に任せたい」
「これ……機械ですか？　新型の？」
「そうだ。お前をこいつの試験運用者に任命する」
目の前に光が瞬いた。運用者ということは、現場監督ということだ。立場的には工場長の次の地位となる。
「ぼ、僕でいいんですか？　なぜ僕が？」
「お前は飲み込みがはやい。この新型は今までとはまったく異なるタイプなんだよ。だからお前のような奴が適任なんだ。なまじっかほかの機械に慣れすぎていると手間取りそうなんでね」
そう言うと、工場長は用紙をトウヤのほうへ押し出した。
「新型の導入は一週間後だ。説明書は明日着く。お前は新型到着までに説明書を読み解いてもらって、当日スムーズに稼働できるようにしてもらいたい。それまで自宅待機だ」
「ありがとうございます……」
工場長はうなずいて立ち上がった。彼が防寒具を身につけている間にトウヤはドアに駆け寄り、代わりに開ける。出て行き際に工場長はトウヤを見て、口を開きかけた。しかし言葉をなにもはき出せず、苦々しい表情を作った。トウヤの脳裏に朝の光景が思い浮かび、胸がしめつけられる思いだった。工場長はなにか言おうと数回試みたが、結局なにも出てこなかった。代わりに重たい手で少年の肩を優しく叩いた。そして振り払うように立ち去った。
トウヤは彼の後ろ姿を見送りながら、一週間ヒナタと顔を合わせずに済むことに安堵しながら、一週間後に会うときどうすればいいのかという不安に押し潰されそうだった。彼女に怒ったことなど一度もなかったし、腹が立ったこともない。だからこそ、その後に襲ってきた罪悪感もひどかった。謝るべきなのだろう。しかし謝り方がわからなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0784f/

灰色の日影

2010年10月8日12時01分発行